

走り娘

大島 行雲

足音がすると分かる。

後ろから、いつもの早いペースで迫ってきて、彼をあっさりと追い抜いていく。駅までのだらだらと長い上り坂を苦にする様子もなく、洗いたてみたいな黒い髪を肩先で軽快に跳ねさせて、スカートの中の細長い脚をひたすら運動させる。

彼が部活の用事で早く家を出た時も、出がけに急に催してトイレに籠もって遅く家を出た時も、いつでも彼女は後ろから走ってくる。どこで抜かれるか、その場所が家の目の前の交差点だったり駅近くのコンビニの前だったりする事はあっても、朝、彼女がずっと歩き続けている姿を見た事は一度としてなかった。そのせいかは分からないが、彼女はローファーを履いていることは殆どなく、大抵は白か青のスニーカーだ。制服から見て違う学校なので、名前も何も分からない。

名前も何も分からないのに、彼は告白した。何日もかけて慣れない手紙を書いて、何日も思い切れぬままに走り去る彼女の背中を見送って鞆の中で封筒をじっくり温めた末、風がやたらと強い或る晴れた朝、走り抜けた彼女を追いかけて走って、びくびくしながら呼び止めて、初めて彼女と目を合わせ、言葉を交わした。

小さな顔、つんと上がった鼻先、薄めの眉毛にくりくりした双

眸は困惑してるのか単に電車に乗り遅れるのを心配してるのかここにあらざる感じで、彼もまた彼女に手紙を押し付けつつ自分が何を喋っているのかまるで分からなかった。

翌朝から彼女の足音は聞こえなくなった。時に足音が迫ってきて一瞬ドキツとしても、それはいつものリズムではなく、彼の横を走り抜けていくのは背広姿の中年男だったりOLらしき小太りの女性だったり。

もう元には戻れない。胸を締め付ける不安と期待は、目を追う毎に絶望と後悔の色を濃くしていく。

後ろから足音が聞こえた。あのいつものペースで迫ってきて、そして、彼の横で止まった。